

氾濫防いだ放水路



この秋、東日本は立て続けに襲った三つの台風で大きな被害を受けた。台風15号(9月9日、千葉市上陸)、19号(10月12日、伊豆半島上陸)、21号(10月24日、小笠原諸島接近)で

ある。国は三つの台風を含め、10月11日から26日の間に発生した豪雨や暴風雨を「激甚災害」に指定し、自治体の復旧事業費の国庫補助率を上げるなどの特例措置を適用した。

三つの台風のうち、静岡県に上陸した19号は記録的な雨量で各地の河川を増水させた。国土交通省のまと

めだと、決壊は福島、宮城など7県の71河川140カ所に及び、決壊や越水などで浸水した面積は11都県の約2万5千ヘクタール。JR山手線の内側エリアの4倍に当たるといふ。

ところが、上陸した静岡県は河川の決壊被害があった7県に入っていない。

気象庁は台風19号を「狩野川台風並みの大雨になる」と早くから警告した。61年前の「狩野川台風」を引き合いに出したのは伊豆半島に予想される雨量。狩野川流域だけで853人の死者・行方不明者を出した同台風の総降水量(伊豆市)は739ミリ、今秋の19号は778ミリで上回った。

その狩野川では決壊も越水も起きなかった。本流を途中から分流させ駿河湾に流す狩野川放水路の効果、と指摘する専門家が多い。同放水路は、狩野川台風を教訓に7年後の1965年に完成した。

19号で果たした役割について、同放水路を管理する国土交通省中部地方整備局では「支流域で浸水はあったが、本流の氾濫を防いだ被害防止効果は約7400億円」と推定している。

県は、今秋の台風による河川被害に鑑みて、支流など小規模河川を含む県管理の全河川に浸水想定区域を設定する方針を決めた。

明日から師走。大きな役割を果たした狩野川放水路の川面を木枯らしが吹き抜けた。

(前静岡県監査委員・富永久雄)



晩秋の狩野川放水路＝伊豆の国市、全日写連・藤田寛司さん撮影